

太平洋クロマグロ2016年生まれ 加入量モニタリング速報 (第3段階 2017年5月)

国立研究開発法人
水産研究・教育機構 国際水産資源研究所

- 九州西で操業した曳縄モニタリング船※1の11月～翌年2月のCPUE※2（漁獲努力量あたり漁獲尾数）を、2016年生まれ群※3の加入動向の指標として分析した（図）。
- 2016年生まれ群のCPUEは、2011～2015年平均の162%、前年比177%であり、2011年以降最も高い。
- 上記から、2016年の加入量水準は、2015年を上回る可能性が高い。
- なお、昨年度までの第3段階速報で指標として使っていた、曳縄による鮮魚用途の漁獲量と養殖用種苗の活込尾数の情報（参考図）は、漁獲量上限に伴う制限と種苗の活込状況の変化※4により加入量水準を的確に反映しなくなったと判断されるため、今回は指標として使用しなかった。

（※1）長崎県対馬・五島周辺で操業したモニタリング船の漁獲データを使用した。

（※2）月や海域の効果を考慮した標準化処理を行った。

（※3）南西諸島海域及び日本海それぞれの産卵場で生まれた群から構成される。

（※4）養殖用天然種苗は年間の活込が制限されており、2016年は、1歳魚種苗（2015年生まれ）が優先して多く活込まれたため、秋口以降、曳縄による0歳魚種苗（2016年生まれ）の活込尾数が制限され、結果として2016年の加入量水準を反映しない（過小になっている）と考えられるため。

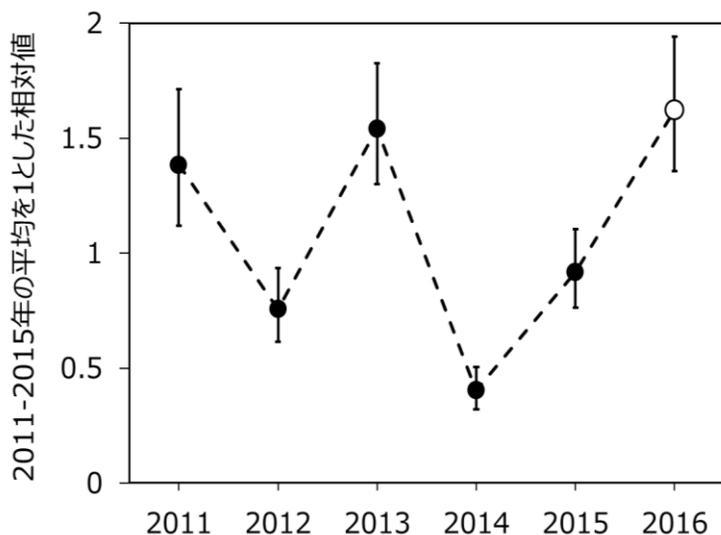
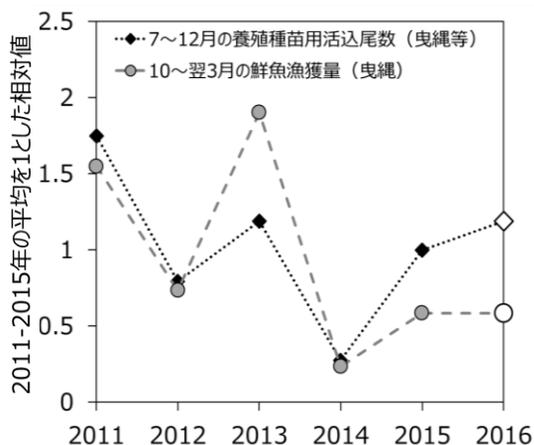


図. 九州西の曳縄モニタリング船の11月～翌年2月のCPUEの相対値. 図中の垂線は95%信頼区間を示す.



参考図. 曳縄漁船の10月～翌年3月の鮮魚漁獲量と7～12月の養殖用種苗の活込尾数.